

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名： 長沼 美香子

長沼美香子氏の博士号請求論文「訳された近代——文部省『百科全書』の翻訳学」、日本の近代を翻訳の問題系から再考しようとしたものである。

文部省『百科全書』は、文部省が主導する国家的な翻訳事業として、ヴィクトリア朝時代のイギリスで出版された『チェンバース・インフォメーション・フォー・ザ・ピープル』を日本語に翻訳したものである。長沼氏の翻訳論の独自性は、通常の「原著」と「翻訳書」といった、「オリジナル」と「コピー」という位置づけではなく、『チェンバース・インフォメーション・フォー・ザ・ピープル』を「起点テキスト」と位置づけ、訳出された文部省『百科全書』と対等の位置に置くところにある。

そして文部省『百科全書』が、日本の近代化にどのような言語的な影響をもたらしたのかという形で、テキストとしての文化的社会的機能を明らかにしようとしている。長沼氏は現存する英語版と翻訳版の複数の刊行本を精査したうえで、原文と翻訳文の詳細な相互比較を元に以下のような考察を本論文で行った。

第一章では本論文における翻訳をめぐる理論的な前提を、野上豊一郎と柳父章の論の検証によって、中心となる「等価概念」の位置づけが行われている。

第二章では国家的翻訳事業の全体像を、史実、人物、書誌情報を整理することによって歴史的に叙述している。

第三章から九章までは、各章でテーマ設定を行い、九十巻をこえる文部省『百科全書』の分析が行われていく。

第三章では「身体教育」という訳語から、「体育」という近代日本の学校教育概念の成立過程を説き明かし、近代国家における身体の規律訓練的な捉え方の思想系譜が論じられている。第四章では、日本初の近代国語辞書『言海』を編纂した大槻文彦の翻訳行為の意義が明らかにされている。第五章では「宗教」という翻訳語が、逆説的に非「宗教」を成立させ、そこに「靖国体制」の基本型が位置づけられたと分析している。第六章では「大英帝国」という翻訳語が問題化され、蘭学から英学へ転換する中での「帝国」という訳語の意味の変遷が辿られていく。ここまでが近代国民国家の形成と翻訳語の関係である。

第七章の「骨相学」では近代科学のまなざしが、人間の顔をどのようにとらえたかを論じながら、「科学」と「疑似科学」の境界に説き及んでいく。第八章では『百科全書』の全体の半分を占める自然科学のテキストを概観し、蘭学から英学への翻訳語の継承が辿られている。第九章では文部省『百科全書』が出版物として、どのように流通し消費されていったかが、歴史的かつ社会的に論じられている。

終章では論文全体の内容を振り返り、近代日本における翻訳語が、漢字二字熟語を中心とする漢語名詞であったことの問題が分析的に論じられている。表意文字である漢字を組み合わせることによって、原語の意味を正確にうつしとっていなくても、微妙な意味のずれ方の総体として、二字熟

語が様々な文献において使用されて反復されることによって、権威としての意味が成立する機構と仕組みが明らかにされている。

審査の中において、文部省という国家機関によって一大事業として展開された、『百科全書』の翻訳がどのような歴史的意義を持つかが明確にされた点がまず評価された。

『百科全書』の翻訳者たちが、後の大日本帝国において、きわめて重要な役割を担う政治家や学者になっていくことが叙述されることで、この翻訳事業それ自体が、近代的知識人を養成することにつながったことも明らかにすることが出来ているとの指摘があった。

また、主要な翻訳語が、漢字二字熟語でつくられており、柳父章氏の指摘した「カセット効果」（意味それ自体としてはきわめて曖昧だが、あたかも正確に外国語を日本語に置き換えたかのように印象づける効果）がどのように、近代的な学知を方向づけていったかが各学問分野ごとに整理されていることも評価された。

あわせて名詞としての漢字二字熟語の翻訳語が、サ行変格活用の動詞として使用されていくことによって、『百科全書』各巻の中心概念が、後の近代日本語とし流通していく道筋も適確に叙述されていると指摘された。

さらに、翻訳者だけでなく校訂者が独自におかれていることに注目し、翻訳という行為が個々別々に言葉のある言語から別の言語に移しかえるのではなく、起点テキストとしての原文と、等価な言説空間を全体として創り出そうとしている営みだったことを明確にしたところも注目された。

『百科全書』の翻訳者や校訂者の何人もが、1879（明治12）年に西村茂樹が建議した、日本古事全般を集めた『古事類苑』の編に加わったことが明らかにされることで、『百科全書』の翻訳出版が、その後の近代日本の大規模編纂事業の重要な出発点になったことの指摘も高く評価された。

他方で、蘭学から英学へ幕末期に転換していく過程と、翻訳語の変遷については、より精微な分析が必要であるという指摘がなされた。オランダ語の名詞の構造と、漢字二字熟語との親密な対応関係を考慮に入れたうえで、変化した訳語と変化しなかった訳語との違いを記述すべきだという批判である。

この批判は、とりわけ「帝国」という訳語と、「言語」という漢字の訳語の発音の仕方をめぐって（「ゴンゴ」、「ゲンギョ」、「ゲンゴ」）の分析に対して向けられていた。

また、最初の文部省の翻訳事業で、知識を科学的に叙述した「エンサイクロペディア」ではなく、「インフォメーション」のシリーズが選ばれたのかということについての分析が必要だという指摘もなされた。

さらに書誌的な整理に、いくつか不正確なところ、曖昧なところがあるという批判もなされた。

しかし、これまで全体的な研究のなかった文部省『百科全書』を詳細に読み込み、各巻の中心概念となる翻訳語を、一つひとつ分析的にとらえ直し、対象となっている学問分野における概念史の中で位置づけ直した論文の成果は高く評価された。

とりわけ、明治の変革期において、国家プロジェクトとして行われた、文部省『百科全書』を対象にしたことによって、一つひとつの翻訳語の背後に、明治新政府がどのような権力機構であったかが、見えてくるところまで論が進められているところが評価された。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。